論　文　要　旨

氏　名　　井上　貴保子

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

芥川龍之介研究

――〈「話」らしい話のない小説〉を中心として――

論文要旨（別様に記載すること。）

（注）１．論文要旨は、A4 版とする。

２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。

３．「論文要旨」は、ＣＤ等の電子媒体（１枚）を併せて提出すること。

（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。

本研究は、芥川龍之介が晩年に提唱した〈「話」らしい話のない小説〉をめぐって、

・芥川作品では〈「話」らしい話のない小説〉がどのように表現しようとされているか。

・その方法は従来の芥川作品の方法とどのような関係にあるのか。

を明らかにすることを目的とする。そのために、本研究は以下の方法をとっている。

i　まず、〈「話」らしい話のない小説〉論の関連が指摘されてきた作品を確認する（第一章第二節）。そこで、〈「話」らしい話のない小説〉の「実作」には、私小説的作品と断章形式の作品の二つの傾向が挙げられることを確かめる。

ii　芥川作品全体の流れを見て、右の二傾向がその中でどのように位置づけられるのかを確認する（第二章）。

iii　芥川作品における私小説的作品、断章形式の作品のそれぞれの変遷と、特徴を明らかにする（第三、四章）。

iv　iiiで明らかにした特徴を踏まえて、晩年の芥川作品の特徴を見ていき、〈「話」らしい話のない小説〉がどのように表現されようとしていたのかを結論付ける（第五章）。

各章の内容は、具体的には以下の通りである。

まず第一章「〈「話」らしい話のない小説〉の前提」では、本研究の前提として、第一節で芥川の〈「話」らしい話のない小説〉論を、谷崎潤一郎との「論争」を辿りながら、整理する。そこで、芥川論のキーワード、〈「話」らしい話のない小説〉と「詩的精神」が別の問題であることを確認し、本研究では前者を扱うことを述べる。

第二節では、先行研究で〈「話」らしい話のない小説〉の「実作」とされている作品について、同時代の言及から辿って確認する。そこから、「海のほとり」「年末の一日」「蜃気楼」のような私小説的な作品と、「誘惑」「浅草公園」のような断章形式のシナリオが挙げられることを確かめる。

第二章「芥川作品の語りと形式の変遷」では、芥川作品の語り・形式の変遷を通時的に見ていき、右で見た「実作」の二種の語り・形式がその中でどう位置付けられるのか見て行く。

まず第一節では、大正五年から大正六年にかけての変化を明らかにする。大正五年までの芥川作品には、一人称的三人称［＝一人称性の強い（＝語り手が顕在的な）三人称］という特徴があった。それは、透明な語り手によってその語る内容が正しいという権威が潜在化されているリアリズム小説の文体を相対化するものであり、そこでは、語り手を顕在化することで、その権威を可視的なものにしているのである。続いて大正六年の、一人称を利用した「尾形了斎覚え書」「運」に、聞き手の設定と伝聞表現の多用という特徴を見る。この特徴によって、語り手の語る内容に多義性が生まれ、読者の多様な読みを可能にしている。また、「運」において、三人称の地の文に一人称の語りが位置していたことから、そこに別の作中人物が、一人称の語りを相対化する可能性を持ったものとして設定されており、それが「二つの手紙」以降の入れ籠構造に繋がるとする。

第二節では、大正五年までの一人称的三人称・三人称的一人称［三人称性の強い（＝物語内容と語り手の関係が直接的でない）一人称］から、後年の私小説的作品までの繋がりについて考察す

る。大正五年までの一人称的三人称には、語り手を顕在化させることによってその権威を可視化していただけでなく、そこに語り手の、物語世界を創出する恣意性が潜在していた。そのような具体的な語り手を作中に示す一人称的三人称・三人称的一人称が、作中に地の文の創作主体や「作者」を登場させ、地の文の安定性を崩す作品に繋がったと見る。そしてこの方向の延長として、〈作者〉が語り手、作中人物となる私小説的作品があると位置付ける。

第三節では、大正六年に現れた、作中の複数の言説同士が相対化しあう入れ籠構造が、次第にその顕在的な構造を潜在化させて行く方向と、言説同士の関係が希薄化する傾向を見、後者が断章形式の作品に繋がると展望する。

第二章を踏まえて、第三、四章では、私小説的作品、断章形式の作品それぞれの変遷と特徴を追う。

第三章「芥川と私小説的作品」では、芥川の私小説的作品を扱う。まず第一節で芥川の小説と事実をめぐる言説を確認する。従来芥川は「告白」嫌いな作家と見なされてきたが、実際に芥川の言説を見てみると、小説と事実とを遠ざける言説と近づける言説の両方が見られることが分かる。この前者の、小説から事実を読み取ること〈の反撥や相対化の言説が、小説を事実と見まがわせる、潜在的な権威を持つ透明な語り手を備えたリアリズム文体に相対する試行と通底しているとする。

第二節では、芥川の私小説的作品を〈芥川〉の登場する作品と広げ、〈芥川〉作品と呼称し、その変遷と特徴を見て行く。大正五年までの一人称的三人称小説では、その具体化した語り手が、「作者」〈芥川〉との接続が容易にされており、この語り手のイメージが〈芥川〉のイメージとして流通する仕組みが作られている。このように語り手が、〈作者芥川〉としてより具体化されることにより、第二章で見たように、語り手の権威、恣意性が可視化されるため、第一節で見た小説を事実に近づけることが方法化されて、小説を事実から遠ざける結果をもたらしているとする。

また、大正五年までの一人称小説の〈芥川〉作品では、冒頭で物語世界を回想などとする意味づけ、方向付けがなされており、その位置を足場にして、非夕形文末を用い、物語世界に入り込むように語る特徴が見られた。この、非夕形による物語世界に内在した位置と物語世界を意味づける位置に階層化した右の特徴に対して、大正九年の「槍ヶ岳紀行」では、文末が夕止め中心である為に、物語世界に入り込むような語りが積極的に見られず、また、物語世界を回想などと意味づける位置も顕在化しない。これによって、読者は物語世界内部の位置も物語世界を意味づける位置も提示されないため、物語世界を安定的に把握することが出来なくなる。また、この語りの特徴によって、語り手と物語世界も断絶したものとなってしまう。この語りの特徴は、〈「話」らしい話のない小説〉と関連する私小説的作品「海のほとり」「年末の一日」でも見られ、語り手が「僕」や物語世界を統括的に把握する位置に立たないため、物語を貫く「話」がないように見えるのだとする。また、晩年の芥川に、自身の病についての言及が増加することを確認し、この〈病む作家芥川〉のイメージが、右の語り手の特徴に奉仕していることを見る。ここでも、第一節で見た、小説を事実に近づけることが方法化されて小説を事実から遠ざける結果をもたらしているとする。

加えて、補論「芥川作品の文末表現」において、芥川作品の文末表現の変遷をまとめ、第三章の

裏付けとした。

第四章「芥川の断章形式の作品」では、芥川の断章形式の作品を扱う。まず第一節で、芥川の章形式を持つ小説を取り上げ、大正十年までは入れ籠構造のように、章同士に関係性、連続性が見られたものが、大正十一年「将軍」から、章同士の関係性が積極的に持たされていない新しい特徴が見られることを見る。

第二節では、芥川の断章形式の随筆・小品を見、芥川がこの形式を愛用していたにもかかわらず、これらの作品は、それが断章形式であることによって、芥川にとってはあくまで小品、散文詩、シナリオであり、小説たりえていないことを確認する。芥川にとって断章形式は、小説を詩に近づける形式である点、章同士が積極的な関係を持たないため、全体を統一的に把握できる「話」を持ちにくい点で、「詩に近い小説」〈「話」らしい話のない小説〉との関連が予想される。以上から、〈「話」らしい話のない小説〉ではその〈「話」らしい話のない〉こと(断章性)と、〈小説〉(連続性)がどのように折り合わされるかという問題があったことを提示する。

第五章では、第一節で、第一～四章をまとめ、それを踏まえながら、第二節でそれまでに見た、作中で〈「話」らしい話のな〉さを表現する方法が、晩年の作品でどう扱われているのか(いないのか)を結論付ける。

まず私小説的作品「蜃気楼」では、互いに積極的な関係を持たない複数の物象を、私小説的作品であることにより〈芥川〉の「病」言説を担う語り手が弱く繋げるという方法で、断片性に希薄な連続性がもたらされている。このように、断片を繋げ小説に長さをもたらすのに、私小説的作品の語りが利用されている。右のような、断片性にどのようにして小説の長さ(連続性)をもたらすのか、という試行は、「誘惑」「浅草公園」でも見られる。

これに引き続いて、「歯車」では、「僕」の目まぐるしい移動により、互いに積極的な関係性を持たない複数の物象が登場し、作中に断片性が形作られているが、「僕」はその断片に関係性を見出そうとする。この方法で作中の断片的物象には「僕」の認識の中で連続性が生じる。が、「僕」の認識の中で意味づけられてきた複数の物象が終盤で一度に登場することにより、「僕」の認識が「僕」の外部〈流出していく印象が生じ、「僕」の認識と「僕」の外部の区分が崩されている。この、断章性と語りを用いた方法によって、本作に物語世界を統括的に把握する「話」がないように見せているのだと見る。このようにして芥川は、〈「話」らしい話のな〉さ(断章性)と、〈小説〉(連続性)を両立させようとしていたのだと結論付けた。

その一方で、単行本『湖南の扇』に、断章形式の作品や短い小品が小説と並べられて収録されていることから、第四章第二節で見た芥川の「小説」観が変化していることを読み取った。そして、断章形式の遺稿「或阿呆の一生」「西方の人」「続西方の人」が、芥川にとって〈「話」らしい話のない小説〉として企図されていたと読み取ることが可能であると展望した。